



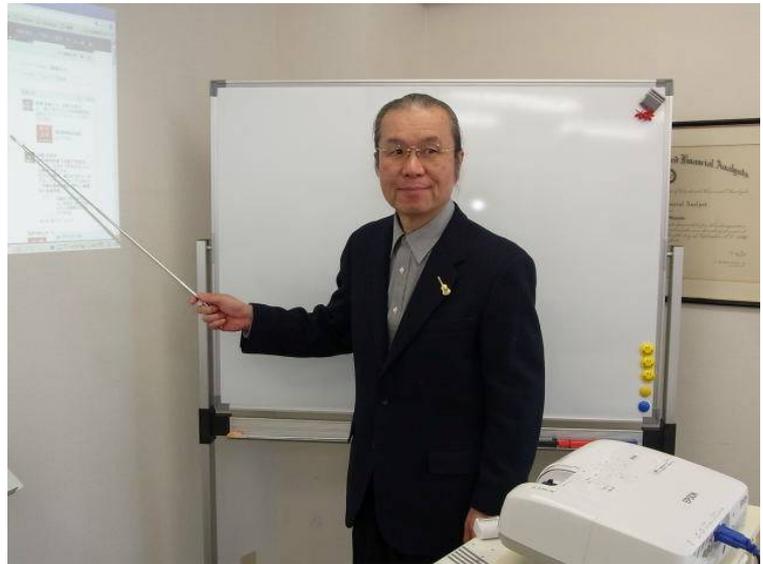
岡本和久講演より お江戸に学ぶ(上): 経済構造の変遷

レポーター: 川元 由喜子; 加筆: 岡本 和久

2013年1月20日に開催されたI-OWA マンスリー・セミナーにおける講演の一部をご紹介します

江戸時代といえば「封建制」、「鎖国」といった言葉が思い浮かぶでしょう。しかしその実態は、初期に完成した封建制が崩れ去っていく、長い、長いプロセスでした。鎖国についても、完全に行われていたのは264年間のうち121年間にすぎません。

江戸時代前半は人口が増加し、米の石高も増加していたのに対し、後半に入ると状況が一変します。長い人口停滞期が続き、米の生産高もほとんど横ばい、米価も飢饉のときを除くとボックス相場となります。経済全体が成熟して成長力が減少していたのです。そして開国を迎えて再び人口が増え、物価が上昇傾向に入ります。この長い停滞期に、封建的な市場統制機構が崩壊する一方、商品貨幣経済が一段と波及し、残っていた農本主義がどんどん崩れていくのです。



幕府の財政は、五代将軍綱吉の時に破綻が顕在化し、享保の改革で幕府は緊縮財政を試みます。しかし直後の田沼時代は成長志向の政策、続く、松平定信は財政再建策、大御所時代には積極財政に戻り、さらに天保の改革では財政再建、というように、成長か財政再建か、幕府の政策は入れ替わりがずっと続くのです。そのような状況のときにプチャーチンやペリーが来航し、外圧が始まります。この状況は、昭和元禄ブームのあと人口減少時代に入り、低成長やデフレと共に財政がひっ迫、緊縮か成長かで政権がいろいろと交代し、一方グローバル化の波が押し寄せてくる、という今の日本と案外似ていますね。

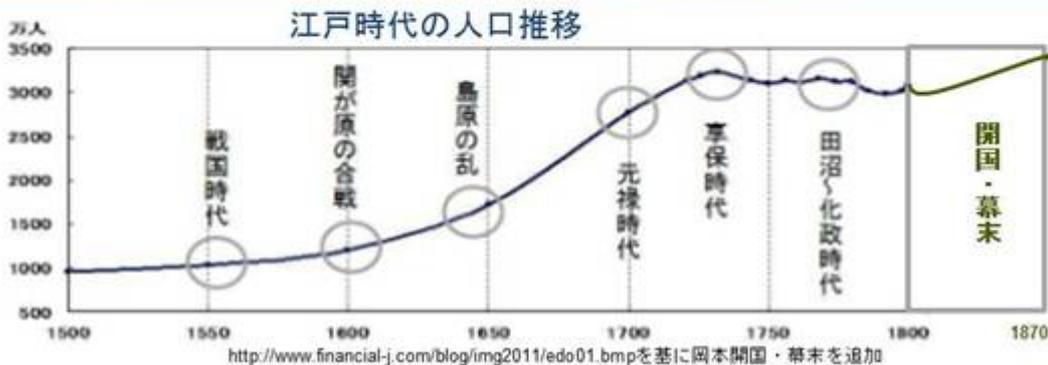
農村では、貨幣で売り買いされる商品の数が増え、商売を営む「農間渡世者」や、土地という資本財を持つことを仕事とする「地主」が出現します。農民経済も貨幣経済の変動にさらされ、波に乗



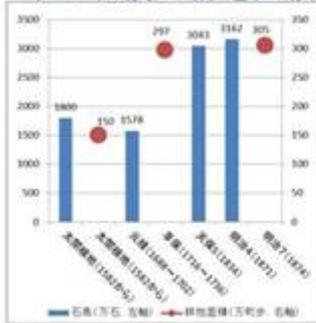
長期投資仲間通信「インベストライフ」

れるかどうかで格差が付くようになります。機織りや味噌・醤油の製造は、農業の片手間に自給自足的に行われていましたが、そのうち町に同業者組合が出来、「株仲間」と呼ばれる組織となります。そして都市と地方に問屋ができ、商人資本の支配が強まってきます。生産者に対する貸付を行う者、また資本だけを提供する企業家・資本家が現れ、生産様式も、雇用される労働者が一つの作業所で、道具を使って、分業に基づく協業を行うマニュファクチュアの工場生産となります。これが最も進んだ蚕糸業は、明治期の主要産業となりました。

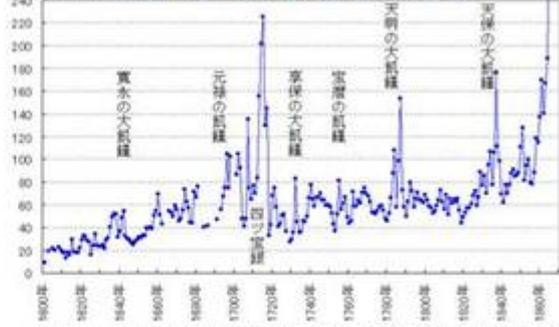
お江戸の基礎知識～人口とおコメ



米の収穫と耕地面積



江戸時代の米相場の推移



講演ではこの後、日本国内での商品流通圏の形成、それに伴って発達する金融、そして諸藩が流通経済に依存する中で武士の地位が弱体化する様をお話いただきました。そのほか諸物価の記録を通してわかる江戸庶民の生活、鎖国という環境の中で発達した庶民文化、また創意工夫に富んだ田沼意次の改革など、大変興味深く伺いました。